

各農業改良普及センター所長 様
 各農業協同組合長（営農担当者） 様
 各病害虫調査協力員 様
 各農業関係機関長・団体長 様

京都府病害虫防除所長
 （公印省略）

病害虫発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病害虫発生予報第 4 号（6 月）

予報の概要

作物名	病害虫名	予想発生量 <平年比(前年比)>	作物名	病害虫名	予想発生量 <平年比(前年比)>
イネ	葉いもち	並(並)	チャ	カンザ ^ワ リハタ ^ニ	山城:並(並) 丹波:やや少(やや少)
	ニカメイチュウ (第1世代)	並(並)		チャノミドリヒメヨコバイ	並(山城:やや多) (丹波:やや少)
	ヒメビ ^ウ ンカ	多(多)		クワシロカイガ ^{ラムシ}	並(山城:やや多) (丹波:やや少)
	縞葉枯病	並(並)			
	ツマク ^{ロヨコ} ハ ^イ イネミス ^ソ ウムシ	並-やや多(並) 並(やや少)			
ナシ	黒斑病 黒星病	並(やや多) やや多(並)	キュウリ、 トマト等	疫病 褐色腐敗病	並(並)
ブドウ	べと病 フタテンヒメヨコハ ^イ	並(並) やや少(少)	キュウリ	べと病	並(並)
カキ	落葉病 うどんこ病	やや少 並(並)	キュウリ、 トウガラシ	斑点細菌病	並(並)
			キュウリ、 トマト等	うどんこ病	並(並)
カンキツ、 ナシ、 フトウ	ハダニ類	並(やや少)	ネギ	さび病 ネキ ^{ハモク} リハ ^エ ネキ ^{アサ} ミウマ	並(並) やや少(やや多) 並(並)
果樹全般	カメムシ類	やや少(少)	ナス、トマト キュウリ等	アブ ^{ラムシ} 類と モザ ^{イク} 病	やや多(やや多)
チャ	もち病 チャノカクモンハマキ	並(並) 山城:やや少-並(並) 丹波:並(並)	果菜類	ハダニ類 アサ ^{ミウマ} 類	やや多(多) やや多(多)
	チャノホリガ ^カ	山城:やや多(やや多) 丹波:やや少(やや少)	アブラナ科 野菜	コナガ	やや多(並)
	チャノキイロアサ ^{ミウマ}	山城:やや多(やや多) 丹波:やや少(少)			

用語の定義

1 半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～最終
	日	日	日	日	日	日

2 発生量 - - - 病害虫の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 発生及び被害等の程度 - - - 程度は甚、多、中、少、無の5段階に分ける。
それぞれの病害虫の基準については各作物の項参照。

4 平年値 - - - 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

5 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

- 農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること -

近畿地方 1 か月予報 (5 月 1 9 日から 6 月 1 8 日までの天候見通し)

平成 1 9 年 5 月 1 8 日
大阪管区气象台発表

< 予想される向こう 1 か月の天候 >

向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は、数日の周期で変わるでしょう。期間の後半はぐずつく時期がある見込みです。

週別の気温は、1 週目は平年並の確率 5 0 %、2 週目は平年並または低い確率ともに 4 0 % です。向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

< 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気 温	4 0	3 0	3 0
降 水 量	3 0	4 0	3 0
日 照 時	4 0	3 0	3 0

注意

大阪管区气象台から発表される天候の 1 か月予報の表現が、平成 1 8 年 9 月 2 5 日以降変わりました。

これまで病害虫発生予察の一つ根拠としていた天候の 1 か月予報の表現と整合性をとるため、病害虫防除所では上記の天候の 1 か月予報の表現を「**向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間は平年並と予想されている。**」としました。

お知らせ

残留農薬基準等のポジティブリスト制度導入に伴う農薬適正使用の徹底について

平成 1 8 年 5 月 29 日より食品衛生法に基づくポジティブリスト制度が導入され、いままで残留基準値が定められていなかった農薬成分と農作物の組み合わせにも、新たに国際基準等を参考として暫定的な基準値が設定されるとともに、参考となる基準がない場合には一律基準 (人の健康を損なうおそれのない量 ; 0.01ppm) が適用され、基準値を超えて農薬が残留する食品 (農産物等) の流通が禁止となりました。

このため、農薬の適正使用はもちろんのこと、周りの圃場の作物へ農薬が飛散 (ドリフト) しないように十分注意してください。

予報本文

イネ

1 葉いもち

予報内容 発生量：平年並（前年並）
発生時期：初発生時期 6月第5半旬（平年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、苗での発生を認めていない。
- (2) 前年の穂いもちの発生は平年比やや少なかった（-）。
- (3) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間は平年並と予想されている。
- (4) 長期持続型箱施用剤の普及率が高まっている（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 空気伝染し、発病適温は14～30（最適25）である。降雨あるいは霧などによって長時間イネが濡れ続ける場合は感染に好適である。湿度が高いと病斑の進展、胞子の形成量は高まる。
- (2) 補植用苗をそのまま放置すると、葉いもちの発生源となる。補植後、速やかに残り苗を処分する。
- (3) ほ場を見回り、肥料がムラ効きしているところを中心に、下葉に発病していないかどうか調べる。特に、畑作跡では注意する。
- (4) 長期持続型箱施用剤を使用していない多肥田や山間、山沿い等の発生しやすいほ場では、曇雨天が続く場合、6月中旬頃に予防のため粒剤などを施用する。
- (5) 平成16、17年度の調査で**MBI-D剤耐性いもち病菌**が一部地域で確認されたので、薬剤の選定にあたっては注意する。

MBI-D剤：カルプロパミド（商品名：ウィンなど）、ジクロシメット（商品名：デラウスなど）、フェノキサニル（商品名：アチーブなど）

2 ニカメイチュウ第1世代

予報内容 発生量：平年並（前年並）
発蛾最盛期：6月第4半旬（平年並）

予報の根拠

- (1) 前年秋期の発生は平年並で、越冬量は平年並と見込まれる。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 稲ワラや刈り株等で幼虫越冬し、年2回発生する。
- (2) 山城地域平坦部の野菜・チャ・イチジク栽培地域等で発生しやすい。
- (3) 6月末に葉鞘変色茎の割合が全体の5%以上の場合、そのまま放置すると経済的被害が発生する。

3 ヒメトビウンカと縞葉枯病

予報内容 発生量：ヒメトビウンカ 平年比多い（前年比多い）
縞葉枯病 平年並（前年並）
発生時期：ヒメトビウンカ第1世代成虫最盛期
6月第3半旬（平年並）

予報の根拠

- (1) 未耕起田等でのヒメトビウンカの越冬量は平年比多い（+）。

(2) 昨年は、縞葉枯病の発生は認めていない。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) ヒメトビウンカはイネ科雑草で越冬するため、前年の発生状況等が翌年の発生に影響する。

(2) 縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介され経卵伝染するが、近年、縞葉枯病の発生は減少している。

4 ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量：平年並～やや多い(前年並)

予報の根拠

(1) 未耕起田等でのツマグロヨコバイの越冬量は平年並～やや多い(+)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 4 齢幼虫でイネ科雑草において越冬する。

(2) 直接吸汁加害する他、萎縮病等を媒介する。

5 イネミスゾウムシ

予報内容 発生量：平年並(前年比やや少ない)

予報の根拠

(1) 前年新成虫の予察灯への飛来数は平年比やや多い(+)。

(2) 5 月第 3 半旬現在、越冬世代成虫の予察灯への飛来数は平年比やや少ない(-)。

(3) 5 月中旬現在、本田での発生量は平年比やや少ない(-)～並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 前年の新成虫が越冬し、田植え後、水田に侵入して葉を食害する。5 月中下旬から卵を産む。

(2) ふ化した幼虫が土中で根を食害する。

(3) イネが根腐れするような水田では幼虫の被害が出やすいので、深水を避け、根を健全に保つ。

(4) 浅水管理は成虫の産卵行動を阻害し、産卵場所を制限する効果がある。

(5) 粒剤の育苗箱施用の効果が高い。なお、イネドロオイムシの常発地では、この方法で防除ができる。

(6) 育苗箱施用剤を使用しなかった場合や田植え後発生が多く、成虫が株当たり 0.3 頭を越える場合は、そのまま放置すると経済的被害が発生する。

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年並(前年比やや多い)

予報の根拠

(1) 5 月中旬現在、発生量は平年並。

(2) 越冬病原菌量は、平年比やや少ない(-)。

(3) 向こう 1 か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 6 月から 7 月の梅雨期が感染最盛期であり、雨が降り続くと被害が多くなる。

(2) 袋掛けは早めに行い、袋掛けの直前に必ず薬剤を散布する。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- （１）５月中旬現在、発生を認めている（＋）。
- （２）向こう１か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）発病適温は１５～２５である。
- （２）雨が降り続き、低温が続くと発生が多くなる。
- （３）赤ナシは発病しやすいので、予防的に防除する。

3 ブドウ ベと病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１）５月中旬現在、発生を認めていない。
- （２）向こう１か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）発病適温は２２～２５である。
- （２）５～６月に多雨であると多発生となる。
- （３）ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。

4 ブドウ フタテンヒメヨコバイ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比少ない）

予報の根拠

- （１）５月中旬現在、被害は認めていない（－）。
- （２）前年秋期の発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）例年、山城地域の一部施設ブドウ園で多発する。

5 カキ 落葉病

予報内容 発生量：平年比やや少ない

予報の根拠

- （１）前年秋期の発生量は平年比やや少ない（－）。
- （２）向こう１か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）潜伏期間が長く、６月中旬から下旬に感染すると秋に多発する。

6 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１）５月中旬現在、発生量は平年並。
- （２）前年秋期の発生量は平年比やや少ない（－）。
- （３）向こう１か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 5 ~ 6 月が初発時期である。
- (2) 6 ~ 7 月に多雨であると、若葉に被害が現れやすい。

7 ハダニ類 (カンキツ、ナシ、ブドウ)

予報内容 発生量：平年並 (前年比やや少ない)

予報の根拠

- (1) 5 月中旬現在、発生量はカンキツで平年並、ナシで平年比やや多い (+)。
- (2) 向こう 1 か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) カメムシ類等を防除するために、合成ピレスロイド系薬剤を使用した園では、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。
- (2) 年間世代数が多く、薬剤抵抗性が発達しやすいので注意する。

8 カメムシ類 (果樹全般)

予報内容 発生量：平年比やや少ない (前年比少ない)

予報の根拠

- (1) 越冬量調査では発生を認めている。
- (2) 5 月第 3 半旬現在、予察灯への飛来は認めていない (-)。
- (3) 5 月第 3 半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は例年比やや少ない (-)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 園外から飛来し局地的に発生するので、特に山林などの隣接園では注意する。

9 その他の病害虫

カキノヘタムシガ・カキクダアザミウマ

果実の被害を防ぐため、開花終了後から 6 月下旬にかけて防除する。

チャ

1 もち病

予報内容 発生量：平年並 (前年並)

予報の根拠

- (1) 5 月中旬現在、発生を認めていない。
- (2) 前年秋期の発生量は平年並。
- (3) 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病斑上に形成された担子胞子が風雨で飛散し、二番茶の新芽に感染する。
- (2) 気温 20 前後で湿度が高く、日照不足の条件下で多発する。
- (3) 一番茶摘採後に病葉が認められる園や常発地では注意する。

2 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない ~ 並 (前年並)
丹波 平年並 (前年並)

幼虫ふ化時期：5月第5半旬～6月第1半旬（平年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない。
- (2) フェロモントラップへの誘殺数は、山城で平年比やや少なく（-）、丹波で平年並。誘殺盛期はともに平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

3 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
丹波 平年比やや少ない（前年比やや少ない）
第2世代幼虫ふ化時期：6月第2～3半旬（平年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、第1世代の発生量は山城で平年比やや多く（+）、丹波で平年比やや少ない（-）。
- (2) フェロモントラップへの誘殺数は山城で平年比やや少なく（-）、丹波で平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、5回世代を繰り返し、5月下旬～6月中旬に第1世代成虫が発生し産卵する。
- (2) 卵は3～7日でふ化し、新芽を加害する。
- (3) 第2世代幼虫の発生時期と二番茶の生育が重なるため、被害が大きくなるので注意する。

4 チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
丹波 平年比やや少ない（前年比少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は山城で平年比やや多く（+）、丹波で平年比やや少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に二番茶以後に増加し、夏秋芽を吸汁加害する。
- (2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高いと多少の雨では影響が小さい。
- (3) 一番茶期に密度が高かった地域では、二番茶の萌芽期から開葉期に十分注意する。

5 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年並）
丹波 平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は山城で平年並、丹波で平年比やや少ない（-）。
- (2) 向こう1か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 5～6月に多発し、10～30 の範囲では高温の時ほど繁殖力は高いが、

降雨により増殖が抑制される。

- (2) 通常、葉の裏側に生息するので、薬剤は葉の裏側にかかるように丁寧に散布する。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生量：平年並（山城：前年比やや多い 丹波：前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、二番茶期以降、発生が多くなる。
- (2) 二番茶の萌芽期から開葉期に加害されると、新芽の生育が著しく悪くなるので注意する。

7 クワシロカイガラムシ

予報内容 発生量：平年並（山城：前年比やや多い 丹波：前年比やや少ない）

幼虫ふ化時期：5月第5半旬～6月第1半旬（平年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間3回（一部山間部では2回）発生する。1回目の幼虫ふ化期は時期が比較的揃っているため、この世代のふ化幼虫を対象とする防除は一年中で最も効果的である。なお、標高の高いところではふ化が10日程度遅れる。
- (2) 薬剤散布は株内部の枝に十分かかるように行う。

8 ミカントゲコナジラミ

ミカントゲコナジラミは、平成16年8月に国内で初めてチャへの寄生が確認され、分布の拡大が懸念されている。巡回調査では、山城地域のほ場で幼虫・成虫が認められ、多発ほ場も見られた。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 成虫は年4回発生し、越冬世代は4月下旬～5月下旬に発生する。
- (2) 農薬による防除適期は若齢幼虫期である。一番茶収穫以降に、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

9 その他の病害虫

ツマグロアオカスミカメ

一番茶期に被害を受けた地域では、二番茶の萌芽期から開葉期に十分注意する。

赤焼病

今春に一部地域で発生が確認された細菌性の病害は、赤焼病の可能性が高いことから、今後の発生等に十分注意する。

野菜

1 疫病・褐色腐敗病

(カボチャ、スイカ、キュウリ、トマト、ナス、トウガラシなど)

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない。
- (2) 向こう1か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 水によりまん延することが多いので、ほ場の排水に努める。特に降雨時の地表水を速やかに排水する。
- (2) マルチを行って、はね上げ伝染を防ぐ。また、溝に落ちて浸水したと思われる蔓は摘除して、ほ場外へ持ち出し処分する。

2 キュウリ ベと病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない。
- (2) 向こう1か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 曇雨天が続くと初発生及びまん延期が早くなる。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えないように肥培管理に注意する。

3 斑点細菌病（キュウリ、トウガラシ）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない。
- (2) 向こう1か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、葉及び果実の気孔等から入って発病する場が多い。
- (2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- (3) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除が重要である。

4 うどんこ病（キュウリ、カボチャ、トマト、トウガラシなど）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、加温栽培のトウガラシ以外では発生を認めていない。
- (2) 向こう1か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 初発生時期が早いと多発し、被害が大きくなる。
- (2) トウガラシ類では、ハダニ類の被害と類似しており判断がつきにくいので十分注意する。

5 ネギ さび病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5 月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) 向こう 1 か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春から初夏に発生が多く、九条ネギは発病しやすい。

6 アブラムシ類とモザイク病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 5 月中旬現在、アブラムシ類の発生量は平年並。
- (2) 5 月第 4 半旬現在、黄色水盤への飛来数は例年比やや多い（+）。
- (3) 農業改良普及センターからの情報では多発ほ場が認められている（+）。
- (4) 向こう 1 か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散・飛来し、発生が拡大する。
- (3) 高温、乾燥が続くと発生が多くなる。
- (4) キュウリの急性萎凋症の発生の多いところでは、アブラムシ類の飛来に特に注意する。

7 ハダニ類（果菜類）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 5 月中旬現在、キュウリでの発生量は平年比やや多い（+）。
- (2) 向こう 1 か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 高温、乾燥が続くと、発生が増加する。
- (2) ハウス栽培では、天候の如何に関わらず増殖しやすい。

8 アザミウマ類（果菜類）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 5 月中旬現在、発生量はキュウリで平年比多く、ナスで平年比やや多い（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ウイルス病を媒介する種もいる。

9 コナガ（アブラナ科野菜）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 5 月中旬現在、キャベツでの発生量は平年比やや少ない（-）。
- (2) フェロモントラップへの誘殺数は、平年比多い（+）。
- (3) 向こう 1 か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 防虫ネット等を利用し、物理的防除に努める。
- (2) 年間の発生回数が多く、各発育段階（卵、幼虫、蛹、成虫）が混在する。

10 ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（ - ）。
- (2) 向こう1か月の気温、降水量はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 5～6月が少雨の年に多発しやすい。
- (2) 発生の目立つほ場も認められるのでよく見回り注意する。

11 ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害、かすり状の食害痕を残す。
- (2) 葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。

12 トマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV：Tomato Yellow Leaf Curl Virus）の感染により引き起こされる病気である。平成17年12月に府南部の抑制栽培トマトで発生が確認され、平成18年9月以降抑制栽培トマトでも発生を確認した。平成19年5月中旬現在、発生は確認していないが、今後とも注意が必要である。

発生生態及び防除上注意すべき事項

トマト黄化葉巻病の発生・拡大を防ぐためには、「トマト黄化葉巻ウイルスの伝染環を絶つ」ことが重要である。そのためには、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

防除対策の基本事項

- ・施設内にウイルス・コナジラミを「入れない」。
- ・施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。
- ・施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。

- (1) タバココナジラミ類を介して伝染するので、発生状況に注意する。
- (2) 苗を購入する時は、コナジラミ類が寄生していないか、先端部の葉が黄色くなって表側が巻いていないかを確認し、健全な苗を植え付ける。
- (3) 発病した株については抜き取り、袋に入れて密封して枯死させるか土中に埋めて処分する。
- (4) 野良ばえトマトも重要な伝染源となるので、自生したトマトは除去する。
- (5) 開口部（サイド、出入口、天窓等）すべてを0.4mm目合いの防虫ネットで被覆する。出入口は2重に被覆する。
- (6) 黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- (7) 近紫外線カットフィルムを使用する。
- (8) コナジラミ類に対する発生初期の防除を徹底する。薬剤で防除する場合は、葉

裏までていねいに散布する。

- (9) 同一系統の薬剤の連用は薬剤感受性の低下につながるため、ローテーション防除を実施する。
- (10) 天敵や微生物農薬を有効利用する。
- (11) ラノーテープを使用する場合は、定植直後から使用する。
- (12) 黄色粘着板を吊り下げて、コナジラミ類の発生を把握する。

1.3 タバココナジラミ類

タバココナジラミ類は世界中に分布し、多くのバイオタイプ（形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統）が存在する。国内では在来系統（バイオタイプ J p L）、バイオタイプ B（従来のシルバーリーフコナジラミ）、バイオタイプ Q が確認されている。

農業総合研究所と病害虫防除所が行ったコナジラミ類分布調査では、タバココナジラミ類は京都府全域に生息していることが判った。平成18年にはバイオタイプ Q が府内で初めて確認され、平成19年には綾部市まで生息域が拡大した。

タバココナジラミ類は従来から薬剤感受性が低く、難防除害虫といわれており、総合的な防除対策（トマト黄化葉巻病参照のこと）が必要である。

花き（キク）

1 白さび病、黒斑病、褐斑病

ほ場をよく見回り、発生を認めたら、被害葉を摘み取るとともに、薬剤を散布する。

病害虫防除については、病害虫防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農業情報は、農林水産省ホムペジの「農業コナ」をご覧ください。
ホームページアドレス <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

農業改良普及センター 電話番号一覧

・京都乙訓	農業改良普及センター	075 - 315 - 2906
・山城北	農業改良普及センター	0774 - 62 - 8686
・山城南	農業改良普及センター	0774 - 72 - 0237
・南丹	農業改良普及センター	0771 - 62 - 0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773 - 42 - 2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773 - 22 - 4901
・丹後	農業改良普及センター	0772 - 62 - 4308

農作物病虫害情報サービス

- ・テレホンサービス
0771 - 23 - 6442
- ・ホームページアドレス
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病虫害防除所

〒621-0806京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-9513